



iStockphoto/Thinkstock

これからの「正義」の話をしよう

いまを生き延びるための哲学

これからの
「正義」の
話をしよう



著者：マイケル・サンデル著、
鬼澤 忍訳

価格：2,415 円

単行本：384 ページ

出版社：早川書房

(2010/5/22)

評点 (5 点満点)

総合	革新性	明瞭性	応用性
3.8	4.0	3.5	4.0

■ 推奨ポイント

1 人を殺せば 5 人が助かる状況があったとしたら、その 1 人を殺すべきだろうか？ 金持ちに高い税金を課し、貧しい人びとに再分配するのは公正なことだろうか？ 前の世代が犯した過ちについて、私たちに償いの義務はあるのだろうか？

本書で著者マイケル・サンデル氏はこのように「正義とは何か」について考えさせられる問いを投げかけてくる。これらは全て、正解はないが決断を迫られるものばかりだ。そして私たちの道德観や倫理観に鋭く訴えてくる。

無論、本書はこうした正解があるのか分からない問いを並べただけの本ではない。政治哲学をこれほど分かりやすく説明してくれる書籍は貴重であろう。アリストテレスからカントやロールズといった古今の哲学者の主張を、様々な問いかけを通じて解明するなかで、単に多数派を重視するとか、自由であることが最重要であるといった考えには欠陥があることが分かるはずだ。ならば私たちが求めるべき正義とは何か。それをどのように政治に活かせばよいのか。哲学という学問は机上の空論では終わらない。

本書はハーバード大学史上空前の履修者数を記録したサンデル氏の超人気講義をもとにしたベストセラーだ。ハイライトでは語りきれっていない内容も素晴らしく、また考えさせられるものばかりである。ぜひ本書

を手にとってこの講義にご参加いただきたい。(荻田)

重要ポイント

- ・正義の意味を探るアプローチには、①幸福の最大化、②自由の尊重、③美德の促進、の三つの観点が存在する。
- ・功利主義の道德原理は幸福、すなわち苦痛に対する快樂の割合を最大化することである。この考え方の弱みは、満足の総和だけを気にしてしまうため、個人を踏みつけにになってしまう場合があることだ。
- ・リバタリアンが主張する自己所有権が認められれば、臓器売買や自殺幫助などの非道德的行為もすべて容認されることになってしまう。
- ・われわれが自らの善について考えるには、自分のアイデンティティが結びついたコミュニティの善について考える必要がある。われわれは道德的・宗教的信念を避けるのではなく、もっと直接的にそれらに注意を向けるべきだ。

ハイライト

正しいことをする

正義の意味を探る三つのアプローチ

二〇〇四年夏に発生したハリケーン・チャリーが通り過ぎた後、生活必需品や家屋の修理業者などが通常の価格よりもはるかに高い価格設定を行い、多

くの市民がこれを非難した。ところが、自由市場を支持する者は、値段が高くなれば多くの売り手が参入し、復興が早くなるとして、自由市場に干渉すべきでないと唱える。彼らに言わせれば、価格は個人が自由につけられるもので、公正な価格など存在しないのだ。また一方で、便乗値上げは単なる幸福と

か自由とかの話ではなく、不道德なものとして反対する人もいる。

この便乗値上げをめぐる論争は、道德と法律に関する難問を提起している。商品やサービスの売り手が自然災害に乘じ、市場でつく価格であればいくらでも請求することは間違っているのだろうか。売り手と買い手が持つ取引の自由に介入することになっても、法律で便乗値上げを禁止すべきなのだろうか。

これらの問題は、個人がお互いをどう扱うべきか、法律はいかにあるべきか、社会はいかに組み立てられるべきかというテーマ、つまり「正義」に関わる問題である。正義の意味を探るアプローチには、便乗値上げ禁止法の問題で見た三つの観点、つまり幸福の最大化、自由の尊重、美德の促進、が存在する。これらの理念はそれぞれ、正義について異なる考え方を示しており、それぞれに強みと弱みが存在する。本書ではこの幸

福、自由、美德という三つの考え方について検討し、正義についての諸問題を考察している。



Noel Hendrickson/Digital Vision/Thinkstock

最大幸福原理——功利主義

他の三人を救うために一人の命を犠牲にしてもよい

か

まずは幸福の最大化という考え方について見てみよう。ジェレミー・ベンサムが確立した功利主義の中心概念は、道德の至高の原理は幸福、すなわち苦痛に対する快樂の割合を最大化することだというものだ。ベンサ

ムによれば、正しい行ないとは、快樂を生み、苦痛を防ぐもの(「効用」)を最大化するものである。

しかし、功利主義の弱みの一つは個人の権利を尊重しないことだ。満足の総和だけを気にするため、個人を踏みつけにしてしまう場合がある。

一八八四年、四人のイギリス人の船乗りが乗っていた船が、南大西洋の沖合で嵐に遭って沈没した。四人は救命ボートで脱出したが、助かったのは三人だった。三人は雑用係の一人を食料にすることで命をつないだ



iStockphoto/Thinkstock

のだ。イギリスに戻ると三人は逮捕され起訴されたが、雑用係を殺さなければ四人全員が死んでいた。功利主義の観点から見れば、四人が死ぬより一人が犠牲になったほうが望ましいということになる。

私は私のものか?——リバタリアニズム(自由至上主義)

自由はどこまで容認されるか

続いて、正義を自由に結びつけるさまざまな理論を取り上げて検討してみよう。

リバタリアンの中心的主張は、どの人間も自由への基本的権利を有しているというものだ。彼らは、経済効率の名においてではなく人間の自由の名において、制約のない市場を支持し、「安全のためにシートベルト着用を義務づける法律」のようなパターナリズム、売春や同性愛の禁止といった道徳的法律、富裕者への課税などの所得や富の再分配を拒否する。

政府による富の再分配に反対

する背景は、リバタリアンの持つ自己所有権という概念である。自分が自分を所有しているなら、自分の労働やその成果も所有しているのであるから、政府が強制的に所得の一部を徴収することは、自分が政府に所有されていることになってしまふ、という理屈だ。

しかし、その考え方の含意するところすべてが簡単に容認されるわけではない。臓器を売買したり、患者の自殺を幫助したり、合意の上で食人したりすることは、自己所有権が認められるのであれば、すべて容認されることになってしまう。

カントとロールズの哲学

イマヌエル・カントとジョン・ロールズも正義とは自由の尊重と考えた。

カントは、自由とは自律的ということであると考えた。自分が道徳法則を望むとき、単に偶発的な欲求や忠誠心に従ってそれを選ぶわけではなく(カント

の言う「自律的である」ということ)、個人的利害や愛着から一步距離を置き、純粹で実践的な理性の主として法則を望むものだとした。

ロールズはカントの自律的自己の概念を取り入れ、みずからの正義論に利用した。個人の関心と利益を脇に置き、無知のベールに覆われたまま選ぶとしたら、どんな正義の原理に同意するかと思考した。

彼らの発想の共通点は、いずれも道徳的行為者を独自の目的や愛着から独立した存在と考えている点だ。自分の役割やアイデンティティ、つまり自分を世界のなかに位置づけ、それぞれの人となりを形作っているものを考慮しないのである。

たがいに負うものは何か?

——忠誠のジレンマ

政治と法律は道徳的・宗教的問題から切り離すべきか

われわれは先祖の罪を償うべきだろうか。ナチス・ドイツの



iStockphoto/Thinkstock

ホロコーストや日本による従軍慰安婦問題など、公式謝罪をめぐる議論が盛んになっているが、国家は歴史上の過ちを謝罪すべきだろうか。

公式謝罪に対する原理的反対論の根底にあるのは、われわれは自分がすることのみ責任を負い、他人の行為にも、自分の力の及ばない出来事にも責任はないという考え方だ。しかしサッデルは、そうした自由の概念には欠陥があると考える。われわれは、選択とは無関係な理由で連帯や成員の責務を負うことがあるからだ。

家族や同胞がたがいに負う特

別な責任、仲間との連帯、村やコミュニティや国への忠誠、愛国心、自国や同胞に感じる誇りと恥、兄弟や子としての忠誠。こうした連帯の要求なしには、生きることも、人生の意味を理解することも難しい。こうした要求は、物語る存在、位置ある自己としてのわれわれの本性を反映しているのである。

こうした道徳的行為の物語的な考え方が説得力を持つとして。そうすれば、自らの善について考えるには、自分のアイデンティティが結びついたコミュニティの善について考える必要があり、そうすれば中立性を求めるのは間違っているかもしれない。リベラル派の政治理論は、政治と法律を道徳的・宗教的な賛否両論から切り離すための試みとして生まれた。しかし、この意図が成就することはない。正義と権利をめぐる白熱した議論が繰り広げられている問題の多くは、道徳的・宗教的問題ととりあえずには論じられない。

正義と共通善

(★ Most Valuable Part)

ケネディとオバマの真逆の演説

一九六〇年、民主党の大統領候補でカトリック教徒のジョン・F・ケネディは、信仰は私的な事柄であり、公的責任とは何の関係もないと言った。四十六年後の二〇〇六年、同じく民主党のバラク・オバマは、党の大統領候補に指名される直前、政治における宗教の役割に関してまったく異なる演説をした。オバマは宗教と政治論議の関連性を肯定する持論を展開したのだ。

ケネディの演説は反カトリックの偏見を和らげるだけでなく、リベラル派の中立の構想、すなわち政府は道徳・宗教問題に関して中立で、個人が自由に自分なりの善良な生活の構想を選ばなければならないという哲学が反映されていた。一九七一年にはロールズがこの構想を哲学的に擁護している。

しかし、一九八〇年のロナルド・レーガンの大統領当選以降、キリスト教保守派の声が強くなり、ポルノや妊娠中絶や同性愛の法的規制を打ち出した共和党に対して、政治には道徳的・宗教的判断が入るべきではないとするリベラル派はこれらの問題について議論することができなくなってしまう不利な事態に陥ってしまった。民主党は雌伏の時代を過ごすことになる。そうした背景から、オバマは国内に広まる道徳的・精神的渴望に対して応えるべく、ケネディとはまったく異なる演説をしたのだ。



Hemera Technologies/Photos.com/Thinkstock

中立性と選択の自由について、道徳的・宗教的議論に踏み込まないということは不可能なのである。



iStockphoto/Thinkstock

共通善に基づく政治

オバマは二〇〇八年の大統領選挙期間中、道徳や精神性を希求する政治をはっきりと打ち出した。彼の真意が、共通善に基づく新たな政治へとうまく転換されるかどうかは予断を許さない。

さて、共通善に基づく新たな

政治とはどんなものだろうか。サントデルは以下の四点を挙げている。

一つ目は「市民権、犠牲、奉仕」。公正な社会には強いコミュニケーション意識が求められるとすれば、全体への配慮、共通善への献身を市民のうちに育てる方法、すなわち公民教育の方法を見つけないければならない。

二つ目は「市場の道徳的限界」。市場は生産的活動を調整する有用な道具であるが、兵役や出産などの社会慣行について、市場の評価基準を持ち込むべきでないものもあるため、われわれは市場の道徳的限界について公に論じる必要がある。

三つ目は「不平等、連帯、市民道徳」。貧富の差があまりに大きいと、富裕層が公共サービスを必要としなくなり、公共の領域が空洞化することで、民主的な市民生活のよりどころである連帯とコミュニケーション意識を育てることが難しくなる。不平等の公民的悪影響とそれを払拭す

る方法について議論すべきだ。

四つ目は「道徳に關与する政治」。多元的社会の市民は、道徳と宗教に関する意見は一致しないものだ。しかしサントデルは、行政府がそうした不一致について中立性を保つのは不可能としても、相互的尊重に基づいた政治を行うことは、可能だと論じる。そのためには、われわれはこれまで以上に多と活発で積極的な市民生活が必要となる。

われわれは同胞の道徳的・宗教的信念を尊重すること、それは、それらを無視し、それらを邪魔せず、それらにかかわらずにいることだと思ひ込んできた。しかしそうした回避の姿勢は反発と反感を生じかねない。われわれは道徳的・宗教的信念を避けるのではなく、もっと直接的にそれらに注意を向けるべきだ。

もちろん、困難な道徳的問題についての公の討議が、同意に至るとは限らないが、やってみないことにはわからない。道徳

に關与する政治は、回避する政治よりも希望に満ちた理想であるだけではない。公正な社会の実現をより確実にする基盤でもあるのだ。

注…本書はハーバード大学史

上空前の履修者数を記録したサンデル氏の超人気講義をもとにしたベストセラーだ。ハイライトでは語りきれっていない内容も素晴らしく、また考えさせられるものばかりである。ぜひ本書を手にとってこの講義にご参加いただきたい。

著者情報…

マイケル・サンデル

一九五三年生まれ。ハーバード大学教授。ブランドeis大学を卒業後、オックスフォード大学にて博士号取得。専門は政治哲学。二〇〇二年から二〇〇五年にかけて大統領生命倫理評議会委員を務める。一九八〇年代のリベラル「コミュニタリアン論争で脚光を浴びて以来、コミュニタリアニズムの代表的論者として知られる。類まれなる講義の名手としても著名で、中でもハーバード大学の学部長目「Justice(正義)」は、延べ一万四千人を超す履修者数を記録。あまりの人気ぶりに、同大は建学以来初めて講義を一般公開することを決定、その模様はPBSで放送された

Copyright © 2013 Flier Inc. All Rights Reserved.

本文およびデータ等の著作権を含む知的所有権は株式会社フライヤーに帰属し、事前に株式会社フライヤーへの書面による承諾を得ることなく本資料およびその複製物に修正・加工することは堅く禁じられています。また、本資料およびその複製物を送信、複製および配布・譲渡することは堅く禁じられています。